

---

# ILLIGAL AKADEMIC STORY

ライトネーム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ILLIGAL AKADEMIC STORY

### 【Nコード】

N7616L

### 【作者名】

ライトネーム

### 【あらすじ】

この物語は、私達の生きている世界とあまり変わりが無い。ただ、この世界で生きている種族が人間だけではないと言っただけのことである。

人間と獣人そして魔族・・・この三つの種族が共に共存している。だが、

種族間の友好的な関係が築かれているとは言えず、世界はジリジリとした緊張感に包まれていた。

そんな中、種族の友好関係を築く事と世界中のあちこちに出現する

モンスターへの戦闘技術を身につける事を目的とした学校が創設される。

そして、今ここに1人の青年が現れた。

## 仲間と歩む道

この物語は、私達の生きている世界とあまり変わりが無い。ただ、この世界で生きている種族が人間だけではないと言うだけのことである。

人間と獣人そして魔族・この三つの種族が共に共存している。だが、

種族間の友好的な関係が築かれているとは言えず、世界はジリジリとした緊張感に包まれていた。

そんな中、種族の友好関係を築く事と世界中のあちこちに出現するモンスターへの戦闘技術を身につける事を目的とした学校が創設される。

そして、今ここに1人の青年が現れた。

### 第1章 規格外な転校生

暖かな日差しが、降りそそぎ桜の舞い散る季節 春。

そして、桜並木の中にそこはあった。

種族統合学園 アクアエリアス・学園としては新しいが優秀な人材を輩出する学園である。

「ここが、アクアエリアスかぁ……。すごい所だな。」

そう感嘆の言葉をもらす青年は、真新しい制服に身を包んで、背中に大きな布包みを背負っていた。ここから、新しい生活が始まるのだと考えると胸が高鳴る。

その時だった。

「えっと、君が転校生君かな？」

彼は、話しかけた声の持ち主へと視線を移した。

そこには、シックな黒のスーツを見に付けた野獣人の男が立っていた。その体はかなり鍛えられているようで、がっしりしていた。

「あつ、今日からアクアエリアス学園に転校してきました、リノアス・ディータスです。よろしくお願いします!」

青年 リノアスは、元気良く挨拶した。

「ハハハ、元気があっていいな君は! 私は、君のクラスである戦闘科担任のビウールズ・プラウドロアだ。よろしく!」

「え、そうなんですか!？」

体つきから教官だと思っていたために驚いてしまったリノアス。

すると、

「なんだ? リノアスは、私が担任なのは嫌なのか?」

急に悲しそうな表情を作るビウールズ。

「い、いいえ! 滅相ありません!」

慌てて言うリノアスだったが、はつきり言って動揺しているようにしか見えない。

「ハハハ、冗談だよ。さて、そろそろ教室に行こうか?」

「はい!」

2人は、巨大な門をくぐり校舎の方へ歩き出した。

校舎は、5階建の建物が6棟あり創設されてから、そんなに年月が経っていないためかどこも新しかった。

「広い学園なんですね・・・。」

リノアスは、事前に貰っていた敷地地図と施設地図を見ながら前を歩くビウールズに言った。

「そうだな。私もここに赴任してきたばかりの頃は、地図無しで歩けなかったからな。」

昔の思い出を語るようにしみじみと言うビウールズ。

そんなに広いのか、この学校は・・・。

そして、2人は、5階まで上がり1つの教室の前で止まった。

「ここが君の教室だ。合図をしてから入ってきてくれ。」

そう言ってビウールズが、教室に入っていた。

やっぱり、緊張するなあ。リノアスは、ゆっくりと深呼吸した。そして、中から「入れ！」と言う合図の音が聞こえた。

リノアスは、教室の扉を開くと、教壇に上がった。

教室自体は、大学の講義室と同じ構造で生徒は、バラバラに座っていた。

「今日からお世話になります。リノアス・データータスです！宜しく願います！」

そう元気良く自己紹介したが、リノアスは、違和感を感じていた。なぜか、種族ごとにきれいに分かれて座っていて人間以外の生徒は、リノアスの事を見ようともしない。

そして、クラス中に立ち込める険悪な雰囲気・・・変な感じだ。違和感を感じるリノアスをよそに話は進んでいく。

まるで、悟らせたくないかのように・・・。

「では、リノアスの席は・・・お、ギース！」

ビールズが、一番端の席に座っている狼人の男子生徒を呼んだ。

「は、はい！」

なぜか、ギースと呼ばれた生徒は、ビクビクした返事をした。

「お前の横にリノアスを座らせるが、いいか？」

「は、はい・・・。」

弱々しく返事を返すギース。

その様子にも違和感を感じながらもリノアスは、笑顔のままで獣人の生徒が多い席の間を取り抜けて行く。

「よろしくね、ギース君。」

そう言って席着いた。

「う・・・うん。よろ・・・しく。」

と顔を逸らしながら呟くように答えてくれた。

その後は、ホームルームが終わると同時に質問詰めだった。

「おい！」

突然、そんな声がした。

その途端、急に周りの生徒達が黙ってしまった。

リノアスが、そこに視線を向けるとそこには二人の男子生徒が立っていた。

かたや不良っぽい生徒とどこか冷たい雰囲気を漂わせた生徒。正直な処あまり友好的な感じではない。

「なん・・・。」

「ちよつと付き合え!!」

そう言つて不良っぽい生徒は、腕を掴んで強引に連れ出した。そのまま三階の踊り場で立ち止まった。

「てめえ、あんまり人間以外の奴らに近づくなよ。」

そう脅すように言ってきた。

こいつは、何を言っているんだ？

「いきなり、なんの脅迫です？」

リノアスは、落ち着いて冷静に尋ねた。

「良いことを教えてやる新入り。」

今まで口を閉じていたもう一人が、口を開いた。

「この学園では、どの種族も友好的ではない。だから、お前も私達人間のグループから出るな。」

「え・・・？なんですかそれは？」

リノアスは、文字通り目が点になった。

その瞬間、いきなり視界が不良生徒の顔のドアップになった。胸倉を掴まれたのだと気づくの少し時間がかかった。

「うるせえな！てめえは、ハイって言つてればいいんだよ！」

不良生徒は、乱暴にリノアスを壁に叩き付けた。

踊り場に衝突する鈍い音が響き渡る。

「痛っ！」

体中に走る鈍い痛み顔に顔をしかめるリノアスを二人の生徒は、鼻で笑った。

「せっかくだ、俺達の名前を教えてやるよ。俺の名前は、ガロス・コウサイだ。覚えときな。」

「私の名前は、リアス・ジークフロストだ。」

そう言い捨てて二人は、教室の方へと帰って行った。そして、1人取り残されたリノアスは、ゆっくり立ち上がると制服の胸元から銀色の鎖で繋がれたペンダントを出した。

そして、それを見つめる目には悲しみの色があった。

「ここでも・・・そうなのか。」

そつと悲しげに呟くと決意したかのようにペンダントをしまい、教室に戻った。

ガラリとドアを開くと騒がしかった教室が水を打ったように静まり返った。

リノアスには、その静寂がまるで決断の時のように感じた。

そして・・・。

その一步を踏み出した瞬間、教室中に動揺が走り抜けた！

なんとリノアスは、最初の席に戻ったのだ。

その瞬間、それが決定であると告げるかのように一時間目終了のチャイムが鳴った。

すると、リノアスはギースの方を振り返ると右手を差し出した。

不思議そうに手を見つめるギースにリノアスは、笑顔をむけてある事を口にした。

「今からでもいいからさ。学校案内してくれないかな？」

とお願いした。

「え!？」

予想もしていなかった言葉だったのか、目を見開くギース。

「あれ、やっぱり駄目かな？」

困ったような顔をして言うリノアス。

すると、なぜか慌てたように立ち上がった。

「う、ううん！いいよ！案内してあげる！」

「よかった！じゃあ、早速お願いしていい？」

そう言ってギースの手を取ると教室を出た。



背中にガロスとリアスの刺すような視線を感じながら……。

その後は、一通り学園を案内してもらったリノアスは最後に屋上へと上った。

「うわー！見晴らし良いなあ！！」

リノアスは、歓声にも似た声をあげた。

学園の屋上からは、街の向こうに広がる海や豊かな自然が見えた。本当に学園の屋上から見える景色とは、とても思えない程のものだった。そんな景色をベンチに座りながら見つめているとギースが何かを持って来た。

「あ、あの……。」

そう言いながらオドオドと缶ジュースをリノアスへ差し出してくれた。

「ありがとう！喉が渴いてたんだ！」

お礼を言ってから受け取り、中身を飲み干していく。

しかしギースは、ジツと立ったまま座ろうとしなかった。

「どうしたの？座らないの？」

リノアスは、自分の横に座る事を勧めた。

しかし、

「いいよ。気にしないで。」

それだけ言ってギースは、リノアスから目を逸らした。

「どうして、ギース君だって疲れてるでしょ？」

その言葉の後、少し沈黙が流れた。

「だって、嫌なんでしょ？」

ポツリとギースは、呟いた。

その声は、風に流されてしまいそうな程、儚かった。

「なにが？」

リノアスは、その言葉の意味について分かっていたが聞き返した。

「僕は獣人だし、それにハーフなんだ。こんな自分が隣に座るなんて本当は、嫌なんでしょ？」

ギースの言葉の中には、どこか諦めの雰囲気がまじっていた。  
その言葉にリノアスは、胸の中に苦いものが広がっていくのを感じた。

最初に説明したように種族間の関係は友好的であるとはお世辞にも言い難い。その上、獣人族の中には系統の違う者同士の子供を雑種ハーフとして蔑んで呼ぶ傾向があった。そうなるかどうかは目に見えている。その事をギースは、気にしているのだろうか。

「だからなんなの？」

「え？」

ギースは、リノアスの呟いた言葉に顔を上げた。

「いつ俺がギース君の事を獣人とかハーフとかって言った？」

「・・・・・・・・。」

黙り込み、再び俯くギース。

その様子を見たリノアスは、ソツとベンチから立ち上がってフェンスにもたれかかった。

「人間と獣人が話をしたり、友達になったりするのがいけないなんて誰が決めたの？」

淡々と呟くように言うリノアス。すると、ギースは顔をあげて

リノアスの顔を見た。

「友達・・・・・・・・？」

ギースは、初めて聞いた言葉であるかのように繰り返して言った。

「俺は、君と友達になりたい。」

リノアスは、静かに宣言するかのようにギースに言った。

「え・・・・・・・・？」

ギースは、耳を疑った。

今、なんて言ったのだろうか？

「前からずっと考えてきた事だったけど、種族が違うからどうだって言うの？ハーフだから友達になったり話をしたりしたらいけない

の？そんなの下らなすぎるよ。大切な誰かと一緒にいる事すら許さないのなら、そんな考え方なんて俺は必要ないし、いらない。だから……。」

そこで言葉を切るとリノアスはギースを見つめて

「俺は、君と友達になりたい。」

沈黙が2人の間に流れた。ギースは、俯いたまま動かなくなった。そのまま、どのくらい時間が過ぎたのか……。

ギースがゆつくりと顔を上げた。

「ぼ……僕でいいんだったら。」

そう言ってくれた顔には、ありったけの勇氣と決意を込めたという雰囲気があった。

その瞬間、リノアスの顔がパツと明るくなった。

「ありがとう！ギース君！」

リノアスは、笑顔と一緒に感謝の言葉を贈った

「うん！！」

そして、ギースもまた笑顔で返事を返してくれた。初めて見るギースの笑顔は引き締まった狼の顔に不釣り合いな程、優しく、暖かな笑顔であった。

今の時代では、珍しい光景だが暖かな雰囲気が屋上の一角を満たしていた。その時だった。

『随分と仲良しだな、新入り。』

「っ！」

ギースは、その声に怯えるように

リノアスの背後に隠れた。

その様子に内心驚きながらもリノアスは、聞き覚えのある声の持ち主を見た。

そこには、いかにも苛立ったガロスと冷たい視線を向けるリアスの二人が立っていた。

「何か用？」

リノアスは、ギースから注意を逸らすために毅然とした態度で言った。

すると、いきなりガロスは、胸倉を掴みあげて睨みつけてきた。踊り場でされた時以上の力が込められていた。

「てめえ！あれほど言ったじゃねえか！裏切ってんじゃねえよ！！！」

歯を？き出しにして脅してきた。

しかし

「離せ……。」

リノアスは、呟くように言った。

「な！」

ガロスは、目をむく。

それを無視してリノアスは、胸倉を掴みあげていた手を払い飛ばした！

「俺が誰と友達になろうと君には関係のない事だろ？」

「んだと！」

ガロスが再び掴みかかろうとしたが、その時には、殴りつけられ床に叩きつけられていた。

「1人じゃ何も出来ないくせに他人の事に口出しするんじゃない！」  
リノアスは、ガロスを怒鳴りつけた。

「く……！！？」

ガロスは、いきなりの展開や発言に完全に動揺していた。

そんなガロスの横をリノアスは、手を引いて足早に通り過ぎようとした。

しかし、今度は、リアスが2人の前に立ちふさがった。

「分かっているのか？そいつは、人間でないばかりかハーフだぞ！？」

そう怒鳴ってきたが、その時には、彼も壁に叩きつけられていた。

「それが何だつて言うの？そんな事を気にしてるなんて子供だね、君は。」

そうリノアスはリアスの胸倉を掴んだまま嘲笑を浮かべた。

そして、離すとドサリ！と音を発てて床に崩れ落ちた。リノアスの瞳には、先程までなかった嘲笑が浮かんでいた。

「行こうギース。」

リノアスは、固まって動けなくなってしまったギースの手を優しく引いて屋上から出て行った。

そして、屋上に残されたのは、ショックで呆然と石像と化したガロスとリアスの姿があった。

ここに小さい変革の兆しが生まれた。

ここから新しい歴史が動き始めた。

## 第2章      パートナー

リノアスが転校してきてから1週間が経ったが、クラスは、落ち着かない雰囲気にも包まれていた。  
その原因は……。

「昨日の戦略の授業は、難しかったあゝ！」

「そう？僕は、そうでもなかったよ？」

このように会話しているリノアスとギースが原因だった。

あの一件以来、2人は、一緒に行動するようになっていたが、その事がクラスメートにとって違和感があるようだった。

しかし、当の2人は、気にも止めず楽しそうに話し続けていた。そこにビールズがやって来て教壇に上がった。

「えー。君達の中にも知っている者もいるだろうが、武術科の生徒は、これから3年間演習のパートナーを決めてもらう事になっている。もちろん、種族は関係無しにだ。」

その言葉にクラスの空気が殺気立った空気に変わった。

「それでは、既に組んでいる者がいたら返事をしてくれ。」  
まあ、いないだろうがな。

ビールズは、クラスの雰囲気ですう諦め気味に呟いた。

しかし

『はい！』

なんと返事が返ってきたのだ！！

一斉に声のした方へ視線が動いた。そこには、決意した様子のリノアスらの姿があった。

「本当か！？」

思わず聞き返すビールズ。

「はい！俺達、パートナーを組みます！」

リノアスは、まるでクラス中に宣言するかのように言った。

その時、ビールズは、彼らならこの状況を打開できるかもしれない！と希望を見出していた。

「では、2人は、道具を全部持って付いて来なさい。今日は、戻ってこないからな。」

『はい。』

2人は、返事をするとう道具をまとめて先に廊下に出ていたビールズの所に向かった。

そして、歩くこと約五分後、巨大なドーム状の建物に連れて来られていた。

「うわー！」

その大きさに感嘆の声を上げるリノアス。

「ここは演習用に作られた屋内グラウンドだ。ここで、ちよつとしたテストを受けてもらう。」

そう言われながら中に入って来る。

そして、屋内グラウンドに足を踏み入れていた。

そこは、スポットライトに照らし出された巨大な正方形のリングがあり、周囲には、見下ろすかのように客席があった。

「それでは、2人とも自分の武器を出してくれ。」

そう言われた2人は、持ってきたケースと布を開いた。そこから現れた物にビールズは、戦慄を覚えた。

リノアスが取り出した武器は、彼自身の身長とほぼ同じ長さの大剣であり、鍔は竜を模した様に角翼と見事な彫刻で彩られていた。

そしてギースの取り出した武器は、一振りの刀であった。

黒檀の鞘には、白銀と蒼で装飾が施されていた。

しかし、ビールズが戦慄を覚えたのは、それでは無かった。

大剣と刀から滲み出るような・・・威圧するかのような強大な力があり、まるで

ソレを押えるかのように鞘と鍔が鎖で縛られていた。

「（まさか・・・これがアレなのか？本当に・・・？）」

ビールズの脳裏にある単語が浮かんだが、有り得ないと頭の外に追いやった。

「では、名前があったら教えてくれ。まず、リノアスから。」

「リフェルリオン です。見ての通り大剣ですが、創作者は不明で触る事ができたのは、俺だけらしいです。」

リノアスは、淡々と答えた。

「リフェルリオン・・・伝説の蒼竜と同じ名前とは、よほど製作者の方は、思いを込めたらしいな。」



ビウールズが、そう言った瞬間、まるで、返事を返すかのように鎖がチャラリと鳴った。

「なに？」

「あ・・ああ！気にしないで下さい！ちょっと、動かただけですから！」

リノアスは、慌てて弁解すると、ギースへと話を逸らした。

「それでは、ギース。名前を教えてください。」

「この刀の名前は 銀嶺 です。一族に代々伝わってきた物らしいのですが、抜けたのは僕だけらしいです。」

ギースもリノアスと同じ様な説明をビウールズにした。

「 銀嶺 ・・ 今度も伝説の中に登場する銀狼と同じ名前か。まるで、運命みたいだな。」

ビウールズは、可笑しそうに笑った。すると、今度もまた鎖が独りでに音をたてた。

「あ！・・い、今のは、手が当たってしまった。」

そんな言い訳をするギース。

明らかにこの2人は、何かを隠そうとしているのは、バレバレであった。

その様子に確信にも似た違和感を覚えつつも手元の書類に書き込んでいくビウールズ、すると、急にその表情が厳しいものになった。「いいか、2人とも単刀直入に言うぞ。これから2人に100人切りをしてもらう。」

『え！？』

「その結果しだいでお前達のパートナー評価を決める。では、始め！！」

その宣言と同時にリノアスらの周りに黒いシミのようなモノが広がり、人型をした何かが大量に出現した。

「アンチ！？」

リノアスは、思わずソレの名前を呼んだ。

アンチ 閻属性の最弱モンスターで一匹なら大した戦闘力はない

が、常に群れで行動し集団で襲ってくるのでたちが悪く鬱陶しい！  
「面倒くさいな・・・。」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！」

ギースのツツコミに現実に戻るリノアス。そして、リフェルリオンを握った。

「目覚めろ。」

その言葉と共に鎖が弾け飛び、鞘から刃を抜き放った。そして、そのままの勢いでアンチの群れに飛び込んでいく。

「消える！」

横一文字に振り抜かれた刀身は、一気に6体の胴体を紙のように両断した。

しかし、振りぬいた状態のリノアスは、無防備な背を晒している。これを見過ごす奴はいない。

そう思ったアンチが一斉に飛び掛ってきた！

だが、リノアスは・・・笑っていた。

次の瞬間、右手に握られていたリフェルリオンを左手に投げ渡して、片腕で振りぬいた！

意表を衝かれたアンチ達は、さらに10体が屠られた。

「（あの長さを片手で！？）」

リングの外から様子を見ているビウールズは声にこそ出さなかったが、驚いていた。しかし、その驚きは、さらに増すことになる。

「行くよ、銀嶺。」

ギースが刀に手を添えて走る。

そして、いくつもの閃光を空中に走らせながらリノアスの背に背を合わせた。

「背後のは、ありがとう。」

リノアスは、視線を向けずに言った。

「どういたしまして。」

同じく視線を向けずに礼を返す。すると、ギースの背後にいたアンチが一斉に切断されたのだ。

「すごいなあ！」

リノアスは、目を丸くしながら驚いたように言った。

「それほどでも。」

照れたように、はにかむギース。何故か仕草が妙に似合っている。  
「じゃ、片づけようか！」

その数分後。

グラウンドの上には、リノアスとギースの二人しか立っていないかった。2人は、静かに刃を鞘に納めた。

と、急に拍手が聞こえた。

「素晴らしい！2人とも最高だ！」

そう賞賛の声をかけながら近づいてくるビウールズ。

「そうでしたか？」

「まさか、ここまでやるとは思わなかったぞ。」

「それで結果の方は？」

リノアスは、気になっていた結果の事を尋ねる。

「文句無しの合格だ。パートナー評価は、Sランクにしておく。」

「よ、よかったあー。」

心底安心したようにギースは、溜息をついた。

「それでは、2人共、案内したい場所があるから付いて来てくれ。」

そう言つてビウールズは、先に出て行った。しかし、2人は、気付いていなかった。

ビウールズの手が微かに震えていたことに……。

先程の屋内グラウンドから歩いて移動する。その間に2人は、互いの剣を剣帯に付けていく。

そして、気付くと校舎からだいぶ離れた場所に来ていた。

「え、ここは？」

リノアスは、キヨロキヨロと辺りを見回す。

「先生、いったい何処に行くんですか？」

ギースもこの事は知らないらしい。

「まあ、もう少し待ちなさい。おっと、見えてきたぞ。」

そう言つて指さされた方向に目を向けた二人は、思わず固まってしまった。

「えーっと、先生？」

リノアスは、一呼吸分ほどたつぷり間をあけてから・・・

「あれは、なんですか？」

リノアスは、目の前にそびえる高級感たつぷりの建物を指さした！

「何って、正真正銘のアクアエリアス学園 戦闘技能科の学生寮だ  
が？」

なにを今更と言わんばかりに溜息まじりに答えるビウールズ。

「え・・・？」

二人は、自分の耳を疑った。

イヤイヤイヤ、こんなテレビでしか見た事がない高級ホテルのよう  
な建物が、たかだか学生の寮だって？

「有り得ないですよ！」

大人しく黙っていたギースもさすがに声をあげてしまった。

「ちなみに言い忘れていたが、パートナーを組んだら自動的に相部  
屋になる。つまりはクラスメートであり、戦闘パートナーであり、  
ルームメイトでもあるわけだな。」

ハハハと笑いながらビウールズは、当たり前のように話を進めてい  
く。

2人は、もはや事の成り行きに任せるほか無くなってしまっていた。  
そうこうしていると、寮（今だに信じられないが・・・）の方から誰  
かが、近づいてきた。

それは、かなり美人な人間の女性であつた。その出で立ち、  
エプロンとバンダナを巻いた、なかなか活発そうな雰囲気をしてい  
た。

「あら、あなた。今日のお仕事は終わったの？」

「……ええ？」

2人は、今の言葉に違和感を覚えた。

「いや、今日は、新しい入寮生を連れて来た。」

「あら、珍しいわね。違う種族同士のパートナーなんて彼等以来じゃないかしら？」

ガンガンまた話が進んでいっているが、ここは、少し待っていただく。

「あの！」

リノアスは、2人に気づいてもらうために少し大きめに声を出した。  
「はい、その青髪君。なにかしら？」

女の人は、まるで、何かの番組司会者のようにリノアスを指名した。  
「えっと、聞きにくいのですが、もしかして、お二人は、結婚なさってますか？」

「ええ、そうよ？それが、なにか？」

聞いた瞬間に、まさかの即答で、答えがかえってきた！しかも、当たり前前の事を聞くなど言いたげな顔までしてだ……。

「ビウールズは、私が心から愛してるダーリンよ？そう見えなかったかしら？」

「お、おいおい！ベアトリーゼ。」

幸せそうな顔をしてビウールズの胸に抱きつくベアトリーゼと顔を真っ赤にするビウールズの2人を見て、リノアス達は、思った。

なんてバカカップル……いや……

バカ夫婦キタ

!!!!

「では、ベアトリーゼ。2人を部屋まで案内してくれ。頼んだぞ。」

そう言つて、ビウールズは、校舎の方に歩いて行つてしまった。

しばし、ハイスピードで動き続けている状況に着いていけない二人は、何とか状況を整理しようとしていた。

「はい、じゃあ、まずは自己紹介からね。」

そう言つてベアトリーゼは、きちんと2人の方を見て

「私の名前は、ベアトリーゼ・プラウドロア。貴方達の寮の管理・監督する寮長よ。宜しくね！あ、愛称は、ベルでいいからね。」

そう元気に自己紹介をベルはしてくれた。

「俺の名前はリノアス・データータスです。所属学科は戦闘技能科です。よろしくお願いします。」

「同じく、ギース・ストライフです。よろしくお願いします。」

2人もきちんと自己紹介を済ませた。

「リノアス君とギース君ね。それじゃあ、2人ともさっそく貴方達の部屋に案内するわね。」

ベルに着いて行きながら寮の中に入ると2人は、驚きに目を見開いた。

豪奢なつくりの家具や内装そして、ホテルのカウンターのようの中には、タキシードを着た従業員が、立っていた。

すると、リノアスの目に人だかりが、飛び込んできた。

何やら立体液晶スクリーンモニターを見つめ、ワイワイと騒いでいる。

リノアスは思わず、ギースに訊ねてみた。

「ねえ、ギース。あのモニターみたいな物は何なの？」

「ああ、あれはね、チームランキングパネル（略してT・R・P）だよ。」

「チームランキングパネル？」

いきなり聞き慣れない単語が出てきた。

「あ、リノアス君は、入学式の時、まだいなかったのよね。」  
先頭を歩いていたベルが思い出したようにリノアスの方に振り返った。

「あのねリノアス君。この学校では半年に1度、パートナー同士が6人1チームを作って、チーム形式の武闘大会が開催されるの。」  
「それに参加すると何かあるんですか？」

「各大会ごとに優勝チームに特典が与えられるの。」

「へえ、例えば？」

リノアスは、思わず、聞いてしまった。人だかりを見る限りでは、かなりの人数が参加しているらしく、それだけの人数が参加しているのだから、とんでもない物に違いない。

「例えば……確か1年間全科目単位合格だったかしら？」  
「……え？」

今、何と仰いましたか？

「それとも、学費免除だったかしら？」

「ええ!!?」

そんなランクの高い特典が叶えられていいのか!?!? というより、やっていいのか!?!?

「まあ、強制じゃないから気が向いたら参加してみるといいわ。」  
そう言いながらベルは、カウンターのの中から2枚のプラスチック製のカードキーを取り出した。

「それが、部屋の鍵になるから。無くしても安心してね。ちゃんとカウンターに戻ってくる仕組みになってるから。」

「分かりました。それで、部屋は？」

リノアス達は、カードキーを受け取りながら、ベルに訊ねた。

「えっと、613号室ね。エレベーターで6階まで上がって部屋に細かい事を書いた紙があるからソレを読んでね。それじゃ、私の仕事があるから。」

「じゃね。」とベルは、何処かに消えてしまった。

意外と大雑把な人だなと2人は、思った。

またしても呆然と立ち尽くすハメになった2人だが、なんとか次の

行動に移る事にした。

「ま、まあ、行ってみよつか。」

そう切り出したリノアスに、ギースは頷いただけだった。恐らく軽く放心状態だったのではないだろうか。

そして、2人がエレベーターまで歩いて行くと、丁度タイミングを合わせたようにドアが開いた。

ラッキーと2人が思いながら中に入り6階のボタンを押すと、ドアが閉まり始めた。

そして、閉じようとした瞬間だった、いきなり、ドアの隙間から指が入り込んできた！

「うわー！！」

異口同音な悲鳴をあげた2人が、驚いている間にドアがゆっくりと開き始めた。

そこには、黒毛の熊人と白色の髪をした人間が立っていた

「ふうー。危なかったぜ！」

そう言つてズスズカと中に入ってくるのは、熊人の青年だった。

「そんなに無理しなくても・・・。」

困ったような笑顔で、答えるのは、人間の青年だった。

「・・・」

沈黙の2人になってしまいうりノアスとギース。

すると、やっとその2人組もリノアス達に気がついたらしく。

「あれ、君達、この寮じゃ見ない顔だけど、もしかして、新寮生かい？」

人間の青年が訊ねてくる。

「はい」

2人は、同時に返事を返した。

「へへえ、俺達みたいな組み合わせもいるんだな、ユキト！」

熊人の青年が、面白そうに豪快に笑いながら言った。

「そうだね、グラット。ところで、君達の名前は？」

ユキトと呼ばれた人間の青年は、



リノアス達の名前を聞いてきた。

「戦闘技能科1年のリノアス・ディータスです。」

「同じく、ギース・ストライフです。」

2人は、もはや何度目かの自己紹介をした。

すると、2人は、少し驚いたような表情をした。

「あの、どうしましたか？」

ギースが、訊ねた。

「いや、まさか、後輩だとは思わなかったから……。」

ユキトが、頭を掻きながら戸惑ったように呟いた。

「え！それじゃ、俺達の先輩なんですか！？」

今度は、リノアス達が驚いた！

「一応、自己紹介しておくね。」

僕は、戦闘技能科2年のユキト・ヴァレンティンです。」

「俺は、ユキトと同じ2年のグラット・バッカスだ。ユキトとは、パートナーだぜ。」

なんとも太陽と月のような正反対の雰囲気をしている先輩達だとリノアス達は、思った。

「ねえ、リノアス君。一つ聞いてもいいかな？」

急にユキトの声が、今までのモノと変わったようにリノアスは、感じながらユキトの方を見た。

「君も種族差別反対派の人間なのかな？」

「はい、大っ嫌いですよ。差別なんて。」

リノアスは、迷いなく即答した。

「そっか、良かった。」

ユキトは、仲間を見つけたかのように安心した顔をしていた。

「よかったな、ユキト！やっと理解者が現れたじゃねえか！」

グラットは、心底嬉しそうにユキトの肩を叩いた。

そんなこんなで、4人を乗せたエレベーターは、6階に到着した。

「それじゃ、先輩方、俺達は、ここで。」

そう言ってユキト達の方を見たが、2人は、既に6階に下りていた。

「あれ？もしかして、リノアス君達も6階なの？」

「はい、613号室らしいです。」

そうギースが、例のカードキーを2人に見せた。

すると再び、2人は、驚いたように目を見開いた。

「ど、どうしました？」

ギースが、不思議に思っ2人に訊ねた。

「いや、俺らの部屋がな……。」

グラットが、チラリとユキトの方を見た。つられて2人もユキトを見ると……。

「僕達の部屋は、612号室なんだ。」

つまり

「お隣さんって、ことですか？」

「と、いう事ですね。」

なんと言う偶然なのか！

そして、リノアスとギースは、2人と別れてからこれから4年間お世話になる部屋の入口に来ていた。

見た目は、普通の外開きドアであり、カードキーを読み込むための端末があつた。

「じゃあ、いくよ。」

リノアスは、自分のカードキーを端末に挿入した。

電子音が鳴り、ドアのロックが解除された。そして2人は、ドアを開けた。

「ここって、本当に寮なのか？」

思わず、そう呟かすにはいられなかった。

部屋は間取りを見る限り、1LDKなのだが、広さが半端じゃなく、家具家電は、最新の物が揃えられていた。

「ここまでくると、もはや、高級マンションじゃない？」

ギースが、目を丸くして呆れたように呟いた。

外見は、高級ホテルで、中身は、高級マンション？

一体この学園は、どうなっているんだ？

### 第3章 癖が強い2年生

その後は、案外律儀な2人は、誰が運んだかは、知らない荷物を整理していた。

「必要最低限の物しか置いてなかったのに、多いなあ。」

荷物整理開始から約1時間が、経過した時にギースが、呟く。

「そうだね。」

リノアスも若干、苦笑いしながら机に写真立てを置いた。

「あれ？それって……。」

「ああ、この写真？」

リノアスは、ギースが、興味を示した写真立てを手に取った。そこには、若い恐らく、20代後半程の男女が、仲良さそうに映っていた。

「仲良さそうだね。もしかして、兄妹の写真なの？」

ギースが、受け取った写真を見て、そう言った。

「いや、両親だよ。」

「へえ……え？」

思わず、納得しかけていたが、ギースは、写真とリノアスを見比べた。

「……リノアス、今、何歳？」

「ん？ 20だけど？」

何を今更と言わんばかりにリノアスは、言った。

「いやいや、どう見てもこの写真の人が、リノアスの両親なら若すぎるでしょ！」

確かにギースの感想は、当たり前の反応である。

「……まあ、いろいろあるのさ。」

そうリノアスは、短く打ち切った。その反応に少し驚いたのは、ギース本人である。その時のリノアスの顔は、初めて悲しそうな色を浮かべていたから……。

なんとなく、気まずい雰囲気になりそうになってきていた時だ。

玄関のインターホンが鳴った。

「誰だろ？」

リノアスが、いち早く玄関に向いドアを開けた。

そこには、ユキト達が立っていた。

「あれ、ユキト先輩どうしました？」

リノアスは、訊ねた。

「まだ、時間も早いからさ。一緒に街に行ってみないかなと思ってさ。」

「お前らも明日休みなんだろう？」

ユキト達の誘いは、今の二人には、好都合だった。

実は、この学園が置かれた街は、所謂、学園都市と呼ばれる街であり、

この地方では、都会の部類に入る場所だった。しかし、リノアス達は、

ここ最近、手続き申請やら講義やらで、街に行く暇がなかったのである。しかも幸いな事に明日は、学園創立記念日で三連休になっていたのだ。

「いいですよ。一緒に行きましょう！」

リノアスは、その誘いにのる事にした。

そして、数分後、2人は、私服に着替えて外に出た。

「じゃ、行こうか。」

ユキトの声と共に三人も歩き出した。

エレベーターで、エントランスまで降りて、ドアが開いた瞬間。

「いい加減にしろ!!」

そんな怒鳴り声が、飛び込んできた。

「?!?」

慌ててエントランスに出るリノアス達。

その目に飛び込んできたのは、大勢の人だかりに囲まれた人だった。

「っ! やっぱり、第一生徒会と第三生徒会か。」

苦虫を噛み潰したような顔をしてユキトが、呟く。

「なんです、その組織みたいなの...」

よく分からない組織名が、また出てきてうんざりしつつあるリノアスは、またも訊ねる。

「第一生徒会は、人間だけで統一された学園でも折り紙つきの実力者で、人間至上主義集団なんだよ。第三生徒会は、その獣人版だと考えてくれていいよ。」

相変わらず、視線は逸らさないで、ユキトは、教えてくれた。

「よく俺とユキトについても噛みついてくんだよ。」

グラットも僅かに牙を見せながら、唸った。

「そんな組織が・・・理念に反している。」

リノアスは、までも見せつけられた事実に失望感を抱いた。

「今度は、誰に・・・!?」

グラットの声が、少し上擦ったもの変わった。

ユキトは、既に、気付いていたらしく目を見開いている。

リノアスもその人だかりの向こうを見た。恐らく、第一生徒会の

ユニホームなのか、白いコートを着た集団の向こうにいたのは、

深みのある紅蓮の髪を肩先まで伸ばして、着崩した制服から見える

胸元には、タトゥーが見える完璧に不良な人間の男子生徒が、煙草

を啜えて、ソファーに座っていた。

「貴様、いつまで、我々をコケにするつもりだ。」

そう吼えているのは、真面目だけが、取り柄そうな男子生徒だ。

しかし、その本人は、完全に無視して悠々と煙草を吸いながら雑誌

を読んでいた。

「貴様、聞いているのか!!」

その態度に堪忍袋の緒が切れたのか、その生徒は、拳銃を向けた。

流石に反応を見せるかと思っただが、向けられた本人は、チラリと見

ただけで、また、読んでいたらしい雑誌に視線を戻した。完全に無

視を

決め込んでいるらしい。

「貴様ああ!!」

銃声が、響いた。その瞬間、その場の空気が凍りついた。

しかし、異変が起きたのは、生徒会の生徒の方だった。

ズルリと糸が切れた人形のように崩れ落ち、動かなくなった。

その先にいたのは、いつの間に抜いたのか、拳銃を向けた不良生徒がいた。

「黙れよ。」

銃を懷のホルスターに戻しながら生徒は、吐き捨てる。

「グレン、まさか殺したのか・・・？」

別の生徒が、恐々と訊ねる。

「殺す価値なんてあんのかよ、お前らに？」

不良生徒 グレンが、酷く冷たい目で聞き返した。  
まるで本当に本心から聞き返したように・・・。

そして、そこにいる生徒会の集団に対して向き直った。

「何度も何度も言わせんな。俺は、俺自身とアイツしか信じねえ。  
お前らみたいなカス共と誰がつるむかよ。いいか今度、くだらねえ  
干渉やこんな押し掛けしてみる。次は、麻酔弾ぐらいじゃ、済まね  
えからな。そう奴らにも伝えな。」

グレンは、もう一度、銃を向けながら脅した。

いや、それは、間違いだ・・・それは、本当なのだ。

その目は、あまりに冷たかったのだ。

その目にギースは、一人、見覚えがあった。

それは、リノアスが、屋上で見せた目と同じだったから・・・。

「グレン、そんな奴らになんて構うな。」

また、別の声が、その場に生まれた。一斉に視線が集まる。

そこにいたのは、焰のような紅の体毛と黒縞の毛が入った虎人が、  
立っていた。

それも犬人の生徒の首筋にナイフを添えて拘束したままの状態でだ。

「・・・ああ、そうだな、バルト。」

そう呟くようにグレンは、再び銃を仕舞った。

「さっさと行くぞ。言葉を交わすだけ無駄だ。」

虎人の男子生徒 バルトが、そう言ってエレベーターの方に歩き出  
した。

すると、ユキト達の存在に気付いたのか、その足を止めた。

「・・・今日は、何も言ってこないんだな。」

グレンが、挑発するように口を開く。恐らく、このような事態は、  
これが、初めてではないのだろう。ユキト達の性格を考えれば、  
今までに何度も衝突を繰り返してきたのは、あまりに分かり切っ  
ていた。

「何も言わないと思ってるのか？」

ユキトは、口調を変えてグレンの挑発に乗った。

「お前らまで俺達に文句か？」

「文句じゃない。君達のやり方が、暴力的過ぎると言ってるだけだ。」

「邪魔する奴は排除する、それだけだ。」

グレンは、冷たくユキトに告げた。

「君達は、お互いしか信じないのか？」

ユキトは、訊ねるように聞いた。その声にも感情はない。

「俺達は、このままでいい。これ以上、干渉するな。」

今まで黙っていたバルトが、睨みあつたままユキトに告げた。

「それでいいのか！お前らは、2人だけのままで、生きてくのかよ！

このまま生徒会の奴らとやり合い続ける気か！」

グラットは、堪りかねたかのように2人に叫んだ。

「……これ以上、貴様らと話す意味がない。」

それだけ言葉を残したままグレン達は、行ってしまった。

そこに残されたのは、大勢の怪我人と空虚感だけだった。

悔しげに俯くユキトは、それから何も言葉を発しないまま街へと続く道を歩いていた。

そして、歩くこと約十分、四人は、賑やかな街の中に来ていた。

「へえー！すごい街ですね！」

リノアスは、目を輝かせた。まだ、新しい雰囲気のある店が立ち並び大勢の人で賑わっていた。

「そうだね、ここは、学園都市だし、結構、若者向けの店が多いからね。」

若者の憧れの街だよ。とユキトは、説明してくれた。やっと、笑顔に戻ってくれていた。

「それで、どこ行きます？」

リノアスが、訊ねてみる。わざわざ誘ってくれたと言うことは、何かあると思ったのだ。

「うーんと、やっぱり、武器に関した店を紹介するね。リノアス君



は、

大剣でギース君は、刀だよな？」

「ええ。」

「だったら、もしもの為に販売店と手入れをする為の店を紹介するよ。」

そう言つてユキト達は、案内するために歩きだした。

「あー。そろそろ、新しいインセントを買つかない。」

グラットが、何気なし呟いた。

「インセントって、グラット先輩は、鎖使いなんですか？」

ギースが、少し意外そうに聞いた。

「あん？鎖使いだが、なんだ、似合わないってか？」

「い、いえ、てっきりパワー系の武器を使ってるのかと思ひまして・  
」

そう言いながら、最後の方は、フェードアウトしていった。

ちなみにインセントとは、鎖のように相手に対して叩きつけたり、鎖を相手の拘束や移動にも使うのだが、如何せん決定打に欠ける武器であつた。そのため、近年では、インセントと呼ばれる交換可能なパーツを使うようになった。しかし、悲しい事に需要がない武器は、総じて値段が高い上に能力がピーキーなものが多かったのだ。

「よく言われんだが、逆に今の先入観が、俺の武器だな。」

熊人は、斧とか大剣なんかの武器を使いたがるっていうのを逆手にとるんだよ。」

「なるほどおー。」

ギースは、関心したように尊敬の眼差しでグラットを見つめる。

「ま、俺から見たらお前の方が、刀なんて高度な技術が必要な武器を使いこなしてるから、そっちの方が凄いで？」

ワシワシとギースの頭を撫でるグラットと褒められて嬉しそうなギース。だが、どうしても身長差うえに先輩後輩というよりも兄弟のように見えてしまった。

「……………」

何故か、その様子に苛立ちを覚えるリノアスとユキト。

その視線を感じて慌てて離れる2人だった。

そんな事が、続いているうちに目的の店に到着した。

「えっと、M・A・S？」  
マリアームズショップ

「うん、ここは、武器に関して手に入らない物がないと言い切れる店だよ。」

「そうなんですか。」

そう答えて四人は、入店した。

え・・・っと、店内の様子を簡潔に表わすと、武器の大展览会だ。

全三階建で、その全てにもう置場が無い程、多種多様な武器や用品果ては、防具まで置いてあった。

「うわー。すごいな。」

これ以上の言葉が見つからない。

「去年の俺らもそんな感じだったぜ。」

「そうだったね。」

ユキト達は、可笑しそう笑って店の奥にあるカウンターに向かった。そこにいたのは、新聞を広げて椅子に腰掛け、堂々とカウンターに足を組んで乗せた銀髪の女性がいた。どうやら、雑誌に夢中で気付かないらしい。商売で、その態度は、如何だろうか。

「マリアさん。」

ユキトが、声をかけた。すると、

「今日は、なんの用だ？」

素気ない声で、雑誌から目を逸らさないまま答えた。

「いや、今日は、後輩を紹介しに来ました。マリアさんは、一見さんお断りですからね。」

「後輩だと・・・？」

後輩という言葉に反応を示したのか、マリアは、雑誌をカウンターに置いて、顔を上げた。

「その後ろの坊や達か？」

「ええ。」

そう確認をとってからカウンターを飛び越えてきた。

その出で立ちは、ジャラジャラと音を発てるシルバークセが装飾された黒コートに深紅のインナーとダメージジーンズそして、西部劇のガンマンが、履いていそうな鋳つきのブーツという女性らしさの欠片もなかった。

「ふーん。なかなか面白そうな奴らを連れて来たね。」

マリアは、ジロジロとリノアス達を眺めながらユキトに言った。

「それに・・・魔剣に妖刀か。」

その一言に、2人は、心臓を鷲掴みにされたような衝撃を受けた。

「ど・・・どうして。」

「ハン！私は、あんたらより武器を見て来たんだ。魔剣や妖刀なんて私にとって珍しくなんてないね。まあ、あんたらのヤツは特別らしいがな。」

マリアは、そう言ってまたカウンターに戻った。

「どうやら、特殊な武器つてのは、互いに呼び合つらしいな　ユキト。」

「っ！？なんで、それを。」

ユキトも動揺した。どうやら何か隠していたらしい。

「私は、武器の専門家であり、トレジャーハンターだぞ？隠しても匂いで

分かるのさ。」

フンと自慢そうに鼻で笑いながらマリアは、カウンターの向こうに消えた。

その後には、いとも簡単に隠していた事を見抜かれたリノアス達は、しばし、

固まっていた。

その理由は、今は、まだ語る事はできない。

なんとかマリアの店で、買い物(?)を済ませて店を出る頃には、

日は、すっかり

暮れてしまっていた。

「いや、なんか大変な一日だったな。」

リノアスは、ポリポリと頭を掻きながら呟いた。その言葉にギースも苦笑い顔

である。

「ま、まあ、マリアさんの店に行けば、魔銃の弾丸とかまで手に入るから定期的に顔出してみるといいよ。」

ユキトもまた、やはり苦笑いである。その理由は、彼の横にあった。「ううう……。高すぎだ……。金が……。どうしよう……。」

呻きと単語単語しか聞こえない言葉を話すのは、グラットだ。

なぜなら、店に行く前に装備を買いたいと言っていたので、マリアに相談した

ところマリアが見つけて来た新製品を売ってもらったのだ。

……。半ば強引に。

その結果、グラット君の財布からかなりの紙幣が、飛び立って行ってしまったのだ。そのショックで、先程から廃人一步手前まで陥ってしまったのだ。

「しばらくは、サポートするからね？　元気だして……。ね？」

なんとか元気付けようとユキトが、必死に励ましている光景は、なかなかコミカルだった。

「今夜、お礼に料理作りましょうか？」

何となしにリノアスが、提案してみた。

その途端、グラットが、リノアスの手を握り涙目で頷き続けた。その時、四人は、何かを感じ取った。匂いがしたのだ。

……。血の匂いだ。

「こっちか！」

グラットは、素早く匂いの出处を確認して走り出した。

そこは、路地裏の一角であった。そこには、大型のネズミラージマウスの

死骸が無数に転がっていた。

「一体、誰が・・・」

ギースが、油断無く刀の柄に手を添えて抜刀できる体勢で呟く。

「でりゃああ！」

急に奥から誰かの声が響いてきた。

「今の声・・・まさか！」

「行くぞ、ユキト！！」

ユキト達は、今の声に聞き覚えがあったのか、奥に向かって走り出していた。遅れてリノアス達も後を追った。

路地を抜け、広場のように開けた場所に出た。そこには、マウス達の大群の中で、闘っている2人の人影が見えた。

一人は、闇に溶け込めそうな漆黒の鱗と相反するような銀色の髪をした竜人と闇の中で目立つ純白の羽毛に覆われた鳥人が、背中合わせで闘っていた。

しかし、2人ともかなり体力を消耗しているらしく、肩で息をしている。

「ち！　いくよ、グラット！！」

ユキトは、軽く舌打ちをしてからグラットに呼びかける。

「任せろ、相棒！」

グラットも呼びかけに答える。

2人に続いて戦闘に参加しようとしリノアス達も武器に手を伸ばす。

「2人は、下がってて。」

ユキトが、前を見ながら言って2人を静止させる。

「え！？」

思わず、足が止まってしまいうリノアス達に

「先輩らしいことさせてよ。」

そう悪戯つぱく笑いながらマウスの群れに2人は飛び込んでいった。

「くそつたれ！なんで、こんなにいやがんだよ！」

黒竜人の青年は、重斧を飛びかかってきたマウス達に叩きつけながら悪態をついた。

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ。」

こちらは、落ち着いた口調で大鎌を振るうのは、白い鳥人である。見渡せば、まだまだマウス達は、残っている。いずれは体力が尽きる。

正に万事休すの状態だ・・・。

しかし、いきなり後方に控えていたマウスが、吹き飛んだ。

「何!？」

2人は、驚き、その方向を見た。そこに立っていたのは・・・。

「大丈夫かい？ヘルド、ルース？」

手に上下に大きな刃が装着された薙刀を握り立っているのは、ユキトである。

「まったく、世話が焼けるな お前らはよ！」

そう言いつつ鎖が、まるで意志を持っているかのように操り、マウスを締め上げ、投げ飛ばしているのは、グラットだ。

「は！ 俺達だけで充分だったのに、美味しい所は持って行きやがって。」

言葉とは、裏腹に安心した様子の黒竜人 ヘルドは、軽口で返す。

「助かります！ナイスタイミングですよ！」

ヘルドと逆に感謝しているのは、白い鳥人ルースである。

「さてと、とつと片付けますか。」

ユキトは、そう呟くと薙刀で空中を薙ぐ。見た目は、空振りだ。しかし、次の瞬間、大量のマウス達が、バラバラにされていく。

「やるねえ、ユキト！」

グラットは、賞賛しながらも指揮者のように鎖を操り、マウスを絡めとり、絞め殺していく。見た目に反して倒し方がエグい2人であ

った。

その数分後、マウスの大群は、全滅していた。

「ふう。やっと片付いたか。」

ユキトは、槍についた血を軽く払い飛ばしながら言った。

「マリアさんのエンチャント使うの忘れてたぜ・・・。」

そう呟きながらグラットは、鎖を袖の中にしまっていた。

「いや、助かりましたよ ユキトさん。」

ルースは、ユキト達にお礼を言っている。

死神の鎌を連想させる大鎌を振るうには、意外に細身な体つきだった。

すると、ルースの目が、立ち尽くしているリノアス達を捉えた。

「あれ、ユキトさん。あちらの方達は？」

「ああ、今年、入ってきた僕達の後輩だよ。」

そうルースに言ってから、リノアス達の方に手招きをする。

俺達は、猫か犬ですか・・・。そう内心、思いながら従う。

「へえ、珍しい・・・。ユキトさん達と同じような人達がいたんですね。」

ルースが、面白そうに眼を細め、掛けている銀縁フレームの眼鏡を持ち上げる。

「彼等も種族差別反対主義の人間だよ。それに見た限り、かなり実力があると僕は、思ってる。」

ユキトが紹介してくれるが、買い被り過ぎである。

「だったら、本当の自己紹介してもいいかな。」

え・・・？本当のって？

意味が分からないと思った2人だったが、その疑問は、一撃とともに消え去っていく。

「戦闘技能科2年 ルース・ブレイダルです。種族は、鴉人です。」

え・・・なに？

「じゃあ、俺も言つかない。俺も学科は同じで学年もユキト達と同じだ。」

名前は、ヘルド・チェイスだ。種族は、白竜人だ。」

・・・なんだって？

「まさか、御二人共、突然変異者ですか？」

リノアスの言葉にルース達の表情が曇る。

突然変異者 全種族で見られる稀にカテゴリー種の遺伝的特徴（例えば、鴉なら羽毛が黒のような）と反対の特徴を持って生まれてきた者達の事を総称してそう呼んでいる。彼等は、その常識離れた身体的特徴を持っている事が多く、そのために忌避される事が多かった。

「さすがに怖いで・・・」

「凄　い！！」

リノアス達は、ルースの言葉を遮る様に叫んだ。

「え？」

「だって、だって、突然変異者の方と2人も会えるなんて感激です。」

リノアスは、恐怖どころか感動で目を輝かせていた。

一方のルース達は、今までに無かった反応されて目を丸くしている。そして、ユキト達に目を向けるが、2人は「ほらね」というような顔をしている。その後は、リノアス達もルース達に自己紹介をしてその日は、分かれた。

そのリノアスの背中をユキトは、密かに心の中で呟く。

君は、一体、何者なんだ・・・？

何故、簡単に心を開かせられるんだ？



その答えを知っている者は、誰もいない。

#### 第4章 本当の思い

胸くそ悪い・・・イライラする。

この気持ちに支配され始めたのは、アイツが来てからだ。

ガロス・コウサイは、イライラした気持ちを抱えながら学園の敷地を歩いていた。

リノアス・データータス

初めて奴と会い、階段の踊り場で突き飛ばした時は、弱っちい奴と  
思っていたが、その後の教室で執った行動や屋上での発言。  
まるっきり別人だった。

「くそ！！」

ガロスは、苛立ちを紛らわせるために近くの壁を殴りつけた。

奴は、目の中で笑ってやがった！

「畜生！！なんで、あんな奴の言う事がきになってんだよ！獣人とか  
魔族の奴らを好きになれる訳ねえじゃねえか！！」

叫べば叫ぶほど、苛立ちと屈辱感が募っていく。

苛立ちに任せて近くの芝生の上に寝転がった。初夏の日差しは、ま  
だ高い。

奴らが担任と先公と一緒に出ていつちまってから、仕方なくパートナーを探したが、誰も組んでくれやしねえ！

やっぱ、日頃の行いが悪かったからだろうな。

意外に、自分が迷惑をかけていると自覚しているガロスは、空を見ていた。

その時、何となく逸らした視界の隅に何かの人だかりが見えた。

「なんだ、ありゃ？」

そう呟いて起き上ったガロス。よく目を凝らして見ると、誰かが寄ってたかつて殴られていた。

「ち！」

ガロスは、舌打ちを一つして人だかりに向かって走り出した。喧嘩は好きだが、卑怯な戦いだけは、大嫌いだったからだ。

しかし、この行動が、ガロスの人生を大きく変える事になるとは、本人は知るよしも無かった。

ガロスは、走りながら人だかりが見える距離まで来ていた。

そして足が、止まってしまった。

大勢で暴行しているのは、自分と同じ人間の生徒達である。そして、殴られているのは、黒いタテガミのある獅子人の男子生徒であった。今、助けに入れば、俺もまた裏切り者と呼ばれる事になるだろう。

それは、嫌だ。見て見ぬフリをするか……。

そう決めたガロスの足は、そこから離れるために動こうとした。

その時、頭の中で、あの言葉が響いた。

『一人じゃ、何も出来ないくせに……。』

リノアスの屋上でのあの言葉だ。その瞬間、自分の中で何かが弾けた。

「うるせえ！見てやがれ、俺は、テメエより弱くねえ！」

そう一人で吼えると人だかりに歩み寄った。

「おい！何してんだ！！」

「あん？ 何だガロスじゃん。」

今まさに殴りつけようとしていた生徒は、手を止めて振り返った。

「何、リンチしてんだよ。」

「はあ？何言つてんの？コイツ、獣人だぜ？それによ、このタテガミが、ウゼエんだよ。」

ゲラゲラ笑いながら、そいつは、獅子人の生徒を殴りつけようと拳を振るった。

だが、その拳は、動かなかった。なぜなら、ガロスが、自身の手で受け止めていたのだ。

「なんのつもりだよ、ガロ……。」

「sonだけが、理由なのか？」

ガロスは、遮るように静かな声で聞いた。だが、心は、マグマの様に煮えくりかえっていた。しかし、それに気づかないそいつは言うてしまった。

「ああ、それ以上の理由があるかよ？」

その言葉が、周囲の耳に入った時には、そいつの顔面にガロスの拳がめり込んでいた。

「ざけんな、テメエら！！」

その言葉と共にガロスは、暴行していた生徒達全員を殴り倒していた。

そして、すぐに倒れている獅子人の生徒を助け起こすと、

「逃げるぞ！走れ！」

そう言つて強引に手を握つて走り出した。

自分は、今まで自分が裏切りと呼んでいた行為をした。

だが、その時には、さっきまでの苛立ちなどは、綺麗さっぱり無くなっていた。

その後、2人は、全力疾走してガロスのアパートまで逃げてきた。

幸いな事に追手は、振り切ったようだ。

「傷の方は大丈夫か？」

「とりあえず、一応、気遣ってみる。」

「ああ・・・痛っ！」

獅子人の生徒は強がっているのか、傷の痛みを我慢しようとしていた。

「まったく、あんだけ手加減抜きでやられたんだったら我慢なんかすんなよな。」

「ちよつと待つてろ。」

そう言つて案外、片付いている部屋に座らせて、寝室の方に消えた。そして、部屋の、それも全く面識のない他種族の生徒の部屋に置き去りにされてしまった彼は、驚いていた。

実は、彼は、ガロスと同じクラスの生徒だったのだ。

そのため、日頃のガロスが、人間以外を嫌っているのを知っていた。それなのに、自分を助けている、意味が分からない・・・。

「なんなんだよ、アイツ。」

独り言のように呟く。

「アイツつて、俺のことか？」

突然、背後からガロスが話しかけてきた。

「うわああああ！！！」

あまりの驚きに椅子から転げ落ちてしまったが、強打した尻を押えながら、ガロスを見ると、救急箱を持ったガロスが立っていた。しかも呆れながら・・・。

「さつさと傷を見せな。化膿する前に。」

そう言つて消毒液など取り出した。しかし

「・・・いい。」

「いや、いいつて事ないだろ？ ほら、傷見してみ？」

比較的優しい態度で接する。

「いって言うてるだろ！」

そう言って手を払い除けた。流石に頭にきた。

「てめえ！人が手当てしてやるって言うてんのに！！」

「嘘だろ！！」

彼は、大声で叫んで、ガロスを睨みつけてきた。

驚いた。そいつの眼は、右目に傷を負い、さらに左右で色が違っていたのだ。

しかも、その目は、涙で潤んで、今にも涙が零れ落ちそうだった。

それを見たガロスは、なんとか言葉を出そうとしたが、口はパクパク動くだけで、何も言葉が出てこなかった。

「……………」

何も言うことは出来なかった。

今までいた強気な俺は、もう何処にもいなかった。

その時、何故かリノアスとギースの姿が頭にフツと浮かんできた。

2人の会話や笑顔、それを見ていて何処か感じていた羨ましさ。

そうか…………今、全部分かった。

「ゴメンな。」

自然とその言葉が、口から出た。

「え？」

意外な謝罪の言葉に彼は、耳を疑った。

「俺、ずっと自分の本当の気持ちから逃げてた。人間が好きみたいな顔して本当は、そんなフリして理解しようとしてなかったんだな。」

そう言っただけでガロスは、頭を下げた。その目からは、涙が溢れていた。部屋の中に静かな沈黙が下りた。

「…………もういいからさ、その…傷の手当てしてくれない？痛いんだ。」

そう言っただけで彼は、照れくさそうにそっぽを向きながら血が滲んだ腕

を差し出した。

「お、おう！」

ガロスも、涙を乱暴に拭くと湿布を貼ったり、包帯を巻いたりした。そして、2人は、考えていた。

もしかしたら、チャンスなのではないか……。

リノアス達のようになれる最大のチャンスが今なのではないか……。

「そういえば、自己紹介してなかったな。俺は、ガロス・コウサイだ。」

よろしくな。」

「……俺は、コブメス・アウトイーダだ。」

照れているのか、頬を赤くしながらそれだけ言ってくれた。

その時だった。ドアのチャイムが鳴った。

その瞬間、表情が、硬くなる2人。まさか、追手が来たのか!?

ガロスは、慎重にドアに近づくと

「誰だ！」

ドアに向かって叫んだ。

「リ……リアスだ。は、入っていいか？」

何故か息も絶え絶えの様子のリアスの声が、ドアの向こうからした。ホッと胸を撫で下ろしながらドアを開ける。すると、リアスが、室内に倒れ込んできた。

「お、おい！どうしたんだよ!？」

慌てて抱き上げると顔は、真っ青で死にそうだった。しかし、部屋の外を指さして何かを伝えようとしている。

「？」

ガロスは、玄関から顔を出すと硬直した。

そこには、リアスと同じくらい真っ青な顔色の魔族の生徒が倒れていた。

「それで、なにがあっただ？」

2人の体調が、何とか通常に戻ってから事情を聴いてみた。

「何から説明したものか……。」

珍しく悩み顔のリアス。学年一の秀才が、悩むなんて珍しい光景だ。すると、意を決したように制服の袖に隠された右腕を見せた。

そこには、牙が突き刺さったような二つの穴があった。つまり、

「もしかして、その魔族に血をやったのか？」

「ああ。」

リアスは、迷いなく答えた。

「万年貧血、絶望的に体力無しのお前が、随分と無茶したな。」

ガロスは、呆れた様に苦笑した。

「俺は、裏切り者になってしまったな。」

「なんで、助けたんだ？」

本当に理由を聞いてみたい。一番しなないと思っていた人物が、あり得ないと言っていた行動をとっているのだ。

「……アイツの、リノアスの言葉で、助けていた。」

「ふう〜ん。」

正直、驚かなかった。それが、理由だろうとどこか確信していた。

「……殴らないのか？」

リアスは、殴られる覚悟できていたのだろう、意外と普通に終わってしまった事にリアスは、拍子抜けしてしまったようだ。

「だって、俺もコイツと相棒になるって決めたからな。」

そう言っただけで、横にいたコブメスの肩を抱いた。

「なあ、だめか？」

「ダメって言っても無理なんだろう？ いいぜ、相棒になろう。」

コブメスも笑ってガロスの肩を抱き返した。

「らしいぞ。バーク・カオスベイン？」

リアスは、横にいる吸血鬼の青年にいった。その言葉に、深紅の瞳を向けたのは、恐ろしい程の美形の顔だった。

「いいのか？ 私なんかで、ほかにいい奴がいるだろうに。」

ベークは、確認するように静かにリアスに訊ねてくる。

「言わなかったか？ 私もお前とパートナーになりたいんだ。」

そう言ってリアスは、微笑んだ。

今まで、世界の常識に囚われていた俺達。

だけど、アイツの言葉で、掛け替えのない存在に気付けた。

感謝してもしきれないぜ・・・全く。



## 第5章 アウトサイダーの烙印

俺が、入学してから早いもので、もう2ヶ月が、経とうとしていた。相変わらず、周囲の種族差別主義の人達や、生徒会のメンバーから、監視にも似た目を向けられているが、そんな事は今の俺には、関係ない。

なぜならば…………。

「くそー！また、リアスの勝ちかよ！」

悔しそうに唸るのは、ガロスだ。

「フツ、私が、学力でお前に負ける訳ないだろう。」

「な、なんだとー！」

鼻で笑うリアスに対して、ガロスが、また噛み付く。

もはや、定番の光景とも言えるこのテスト比べは、今のところ、リアスの

首位独走状態だ。

「まあまあ。ガロスもこの前より点数上がったんじゃない。」

そう宿めるのは、コブメスである、以前までは、隠すことが多かった右目も

今では、堂々と見せている。

「やはり、リアスには、勝てないか。今回は、勝ったと思ったのだ  
がな……。」

少しばかり、残念そうな顔をして掲示板を見ているのは、ベーク。

そうは言ってるが、お前、学年2位だろ。

思わず、全員が、ツツコミかけたが、何とか飲み込んだ。

あの後、俺の元にやってきたガロス達は、強引に近い形で、俺とギ  
ースの

パートナーに合流してきた。最初こそは、何か企んでいるのかと思  
ったが、

今では、チームを組んで演習で高成績を収める程にチームワークも  
良く、

絆も強くなってきていた。

そして、今は何をしているのかと言うと学年筆記試験の結果を競っ  
ていたのだ。

「でも、なんだかんだと言っても、皆、学年の上位6位独占してる  
よ。」

リノアスは、そう言って掲示板のモニターを指差した。

「そうだよ。それにガロスは、運動系や精霊学は、リアスよりも点

高いよ。」

ギースが、そう補足するように答えた。

「まあな。運動は、元々、得意だしな。精霊学は、感覚で答えられる。」

「へえ、すごいね。」

ギースは、感心し、ガロスは、得意そうに胸を張っている。

その時、リノアス達のいるエントランスに女子の歓声が上がった。

何かと思い全員が、視線向けた。

そこにいたのは、もう見慣れた純白のコートに身を包んだ第一生徒会の

集団がいた。しかし、その先頭に見慣れない人物が立っている。

「誰だ、あいつ等？」

ガロスが、不思議そうに呟く

「確か、第一生徒会の会長ラース・エスペリオンだ。」

リアスが、思い出したようにその人物の名前を言った。

確かに学園内でも最も巨大な組織である第一生徒会の生徒会長らしい毅然とした態度に、揺るぎのない雰囲気がある。

しかし、それでもこの人第物こそが、リノアス達の障害でもあるすると、今度は今まで黙っていた獣人の生徒達から歓声が上がった。そこにいたのは、今一生徒会と相反する黒いコートを纏った獣人の集団が、

姿を現していた。

「まずいぞ。第3生徒会の連中だ！」

コブメスが、思わず、言ってしまったのは、第一生徒会と第三生徒会は、

会えば、鬭いを始める、いわば、天敵でもあり宿命の敵なのである。そして、運の悪い事にそんな集団が、エントランスという場所出会って

しまったのだ。

すると、案の定、遠巻きから見ても口論が起きたのが、分かった。

どつやら遠巻きから見ても不味い方向に進んでいるのが、手に取るように

感じる事が出来た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7616l/>

---

ILLIGAL AKADEMIC STORY

2010年10月28日08時03分発行